

事例
1

プレゼンテーションソフトウェアを活用した
聴覚障害のある児童への視覚的な支援

総合支援学校 小学部
国 語

キーワード プレゼンテーションソフトウェア
ハイパーリンク機能 視線移動の軽減

「いろいろなふね」

1 単元の学習

単元目標

書いてあることを正しく読み取ることができる。
ほかの乗り物について調べ、発表することができる。

対応する学習指導要領の内容

教科・領域等	内 容 等
国語	B 書くこと C 読むこと
自立活動（コミュニケーション）	・言語の形成と活用に関すること。

2 指導略案

単元指導計画

指導内容等	時間
学習計画を立てよう	2 時間
いろいろな船の「しごと」や「やくめ」を読み取ろう	(本時) 5 時間
乗り物図鑑をつくろう	4 時間

本時の目標と展開

【目標】

写真から特徴を読み取ったり、段落ごとに言葉の意味を確認したりする活動を通して、消防艇の役目や装備を読み取ることができる。

【展開】

学習活動	教師の働きかけと指導上の留意点（情報機器・教材の活用）
本時の課題を知る。 しょうぼういはなにをするためのふねでしょう。	教科書の写真を拡大したカードを提示する。 黒板上に本文を直接提示して、児童の注意を向ける。 （プレゼンテーションのスライドに本文を入力し、プロジェクタで投影） 黒板上の本文を指さして音読させ、漢字の読みの確認を行う。
消防艇は何をしているのかを本文から読み取る。	消防艇の仕事を本文から抜き出させる。 消防車を連想した場合には、消防車の役目から消防艇の役目を類推させる。 ワークシートに答えを記入させてから、黒板で確認する。 ・問われている内容をわかりやすくするために、疑問詞「なに」と書いた緑色のカードを黒板にはって強調する。
消防艇の装備を読み取る。 しょうぼういはなにをつんでいますか。	ワークシートに答えを記入させてから、黒板で確認する。 ポンプやホースは、水が機械を通して出る様子をプレゼンテーションソフトウェアのアニメーション効果を使って説明する。 「つむ」「かける」は動作化や手話単語や日本語の言い換えを通して意味を類推させる。

3 展開の実際

【対象学年・児童生徒】

聴覚障害のある小学部1年の児童1人を対象に、プレゼンテーションソフトウェアを使って説明文の読み取りの学習を行った。

【視線移動を軽減し授業への集中を促す】

教科書の本文と発問を黒板上に提示して視線移動が少なくなるよう配慮した。黒板上の本文で漢字の読みを確認した後、発問に対する答えをワークシートに抜き出すようにした。文の意味は、イラストや写真、アニメーションを用いて説明した。また、画面上の説明だけでなく劇化(動作化、手話化)することにより、確かな語句のイメージをもつことができたかを確認しながら進めた。

4 情報機器等の活用の工夫

【効果的な視覚的な支援】

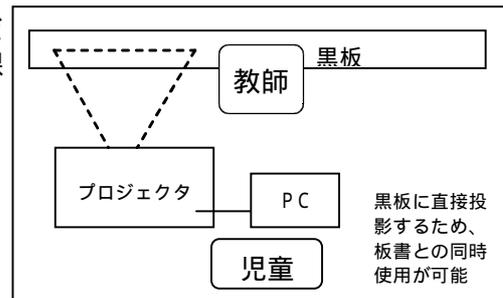
聴覚障害のある児童が話を聞くときは、音声だけでなく視覚的な手段(口形、手話、指文字、発音サイン()など)を大きな手がかりとしている。

授業中の他者の発言の内容を確実に受け止めるためには、作業を中断して発言者に視線を向ける必要があるが、本児は、「聞きながら書く」作業を苦手としており、注意を向けるのに時間を要することがあった。

また、語いを増やすために、視覚情報を効果的に用いて語句の説明を行うことは有効である。これまで、授業では、図鑑や絵辞典、実物、写真などを多様に用いて、語句の理解を図ってきた。しかし、提示する資料が多様で膨大になるほど時間がかかるため、資料の精選とともに提示時間の短縮が課題となっている。

そこで、話者に注意を向けたり、資料提示の時間の短縮、分かりやすい説明のための情報機器の利活用を考えた。

発音サイン・・・口形だけでは区別できない音(子音)だけを表す手指記号



【情報機器等の活用環境】

コンピュータ(パワーポイント2003)

プロジェクタ(4,000ルーメン)

【自作教材開発・作成のポイント】

プレゼンテーションのスライドの背景を黒、フォント色を白にすれば、黒板上に白い文字だけが浮かび上がる。そのことにより、黒板の本文のそばにチョークで書き込みができる。

スライド上にハイパーリンクを設定したボタンを作成することで、順序を変えてスライドを提示することができる。

5 情報機器等の活用の効果

【成果(本時の評価)】

プレゼンテーションソフトウェアを使って写真資料を投影し、「船の火事を消す」ことを写真で説明すると、「消す」という表現が、それまでの「消しゴムで字を消す」動作から「消防士が火事を消す」動作に変わった。それによって、消防艇の役目を読み取るとともに、「消す」という言葉の使い分けを理解することができたと考えられる。

黒板と話者(教師)が同時に児童の視界に入ることによって、児童の視線移動が少なくなり、集中の持続につながるるとともに、同じ画面に資料提示でき、時間短縮につながった。

【改善・工夫を必要とする点】

電子黒板を併用することでさらに効率的に授業を進めることができる。また、ICT機器としてのプレゼンテーションソフトウェアについては、ハイパーリンクでWeb上の資料を参照したり、音声、動画データを再生したりすることができるので、教科・領域を横断した資料集や、児童の自主学習ソフトウェアとしての活用が期待できる。

しかし、聴覚障害の児童に語句の意味を理解させるための資料なので、ICT機器にこだわらず、写真、絵画、実物資料等、質のよい資料を選定し提示することが大切である。